

※クリックすると記事のページを開きます。

①日本語インターンシップ報告（2017 年 1 月）：ヤンゴン日本語教室便り.....	2
②日本語インターンシップ報告（2017 年 3 月）：ヤンゴン日本語教室便り.....	4
③日本語インターンシップ報告（2017 年 12 月）：ヤンゴン日本語教室便り.....	6
④日本語インターンシップ報告（2018 年 1 月）：ヤンゴン日本語教室便り.....	7
⑤JEP 派遣報告（2018 年 3 月・9 月）	8

①日本語インターンシップ報告（2017 年 1 月）：ヤンゴン日本語教室便り

2017 年 1 月 6 日

GJO ヤンゴン

今井己知子

ミャンマーでは 12 月から新年度新学期が始まります。GJO ヤンゴンも 12 月 5 日から新学期が始まりました。今学期は国際交流基金の日本語インターンとして本学大学院生も助っ人として GJO ヤンゴンに加わり、フレッシュな戦力が增強されました。

戦力が増えたことを受けて、今学期は全くゼロから日本語を始めるレベル 1 と、前学期から進級したレベル 3 とレベル 4 の合計 3 クラスを開講しました。

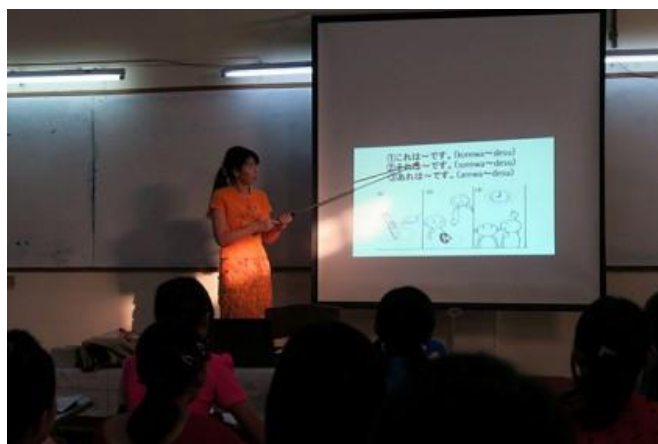
レベル 1 は新入生の入学式等諸行事があったため 12 月 14 日にやっとオリエンテーションを行うことが出来ました。今のところ登録しているのは 50 名ほどですが、実際に出席している人数を数えると、毎回新しい人が入っているのに 40 人前後です。これもあとひと月ほどすれば落ち着くと思います。今学期から教科書等の無償配布は行わず、ミャンマーでの版權を得て当地で出版された教科書『みんなの日本語 I』を学生自身で購入してもらうことになりました。6000 チャット（ミャンマーの朝ごはんをよく食べられる麺料理「モヒンガー」約 12 杯分、バス乗車 30 回分に相当）するので、冷やかし半分に参加する学生は少ないと思われます。

今回は様々な専攻の学生が受講していて、全体の 40% 近くを占める国文学科ミャンマー語の学生の他に、数学・産業化学・地質学・考古学・植物学・英語・コンピューターサイエンス・物理学・地理学など多岐に渡っています。圧倒的に多い女子学生の中に男子学生も十名ほど混じっていて、隅の方で固まっているのが微笑ましくもあります。

これから 3 か月間、何人が残るでしょうか。専攻が多様性に富んでいる方がお互いに刺激になるので、出来るだけ様々な専攻の学生に頑張ってもらって生き残ってほしいものです。

そしてもちろん男子学生にも。

写真は日本語インターンの先生が、レベル 1 の第 2 課を
教えているところです。若くて可愛い先生に日本語を習
えて、学生たちも嬉しそうに生き生きと勉強していました。



②日本語インターンシップ報告（2017 年 3 月）：ヤンゴン日本語教室便り

2017 年 3 月 31 日

GJO 日本語講師

今井己知子

12 月から始まった新学期も 3 月 2 週目の期末試験で何とか無事に終わりを迎えました。

6 月から一緒に勉強してきた Level 4 の学生とは今学期でお別れです。そのせいかどうか分かりませんが、国際交流基金の日本語教育インターンとして 12 月から授業を担当してくれている本学大学院生に、日本語の歌を教えてほしいと言ってきました。Level 4 の漢字教育を担当してくれたインターンとは同世代の親近感で、頼みやすいのでしょう。

でも、頼まれたインターンは大弱り。どんな歌が歌いたいのか尋ねても「先生の一番好きな歌」。実は彼女は英語の歌を聴くのが好きだそうで、「先生の一番好きな歌」と言われても日本語の歌では思い浮かばないみたいです。それで、二人して、どうしたものか頭を悩ませました。小学唱歌はゆっくりで、メロディーもきれいだけど結構格調高い言葉が入っているので日本語初級の学生たちには理解しにくい。歌いやすくて古すぎる演歌は今の若者にはお呼びじゃないし。今の若い人の歌となると、私は全く知らないで手も足も出ません。少し昔の歌でも、歌いやすいメロディーで、あまり難しすぎない歌詞で、となると全く思いつきませんでした。ちっとも決まらないのに、どんどん約束の日が近づいてきたので、私の独断と偏見で『涙そうそう』にしました。



歌のレッスン①

結局この歌のレッスンに参加したのは Level 4 の学生のうち 4 人だけでした。歌詞を渡して、辞書を引いてもらって、『涙そうそう』がサウンドトラックとして使われた映画の解説もしたけど、やっぱりそれでも相当難しかったみたいです。You Tube で何度も曲を流して一緒に歌って小 1 時間の日本語の歌のレッスンは終わりました。楽しんで



歌のレッスン②

くれたかどうかはあまり分かりませんが。初級者に適当な外国語の歌を選ぶのは本当に難しいですね。私もミャンマー語のポップスなんて舌が回らないし、意味が分からないし、お手上げです。

どなたか、日本語学習初級者が理解できる適当な歌があったら教えてください。私もこれから探してみます。よろしくお願いします。

③日本語インターンシップ報告（2017 年 12 月）：ヤンゴン日本語教室便り

2017 年 12 月 5 日

GJO 日本語講師

今井己知子

ミャンマーの国立大学では、教師はインジーという短い上着とロンジーという腰巻風の布の伝統的な民族衣装を身に着けます。今学期 GJO ヤンゴンで日本語授業を手伝ってくれる、JF の日本語教育インターンシップで派遣された本学日本語教育修士課程の院生が仕事用に持ってきたのは脚にびったり貼り付くような黒いスキニーパンツで、それをはくと、まるで中国人留学生の女の子で、どう見ても教師には見えません。それ



購入したインジーとロンジー

で、こちらでインジーとロンジーを調達することになりました。日本語講座の一番上のクラスの学生 3 人と待ち合わせて大学近くのゼー（市場）へ連れて行ってもらい、インジーとロンジー選び。学生たちは色を決めたり、値段をきいたり、紐を結ぶタイプかホックで止めるタイプがいいか、知っている日本語を駆使して新しい先生を大いに助けてくれました。ロンジーとインジーを着ると、すっかり若い色白のサヤマ（女性の教師）の誕生です。学生たちがこのサヤマを早速週末、ヤンゴンの一番の見どころと言われるシュエダゴンパゴダへ連れて行ってくれるそうです。教室の外で実際に日本語を使ういい練習になるし、院生にとってもビルマ人の面倒見の良さに触れられて、お互いに幸先のいいスタートとなりました。



④日本語インターンシップ報告（2018 年 1 月）：ヤンゴン日本語教室便り

2018 年 1 月 5 日

GJO 日本語講師

今井己知子

ヤンゴン大学の学生に少しでも日本文化に対する理解を深めてもらいたいと去年から少しずつ日本文化紹介を試み
ていますが、2017 年の年末は、国際交流基金の日本語教育インターンシップで派遣された本学日本語教育専攻大学
院生が、年の瀬の日本の習慣について紹介しました。紹介したクラスは日本語を勉強して 3 学期目、漢字もまだ 100 文
字程度しか理解できない LEVEL3 なので語彙を選びつつ、イラストや絵をふんだんに使った講義となりました。まず、年
末年始というのは、1 年のいつ頃のことをいうのかから始まって、年賀状の紹介、干支・年男年女、大掃除、しめ縄・門
松・鏡餅などお正月に欠かせない飾り物の意味、年越しそば、除夜の鐘、初詣など短時間に盛りだくさんの紹介では
したが、みんな興味深そうに聞いていました。理想は、この年末の日本の習慣について、ミャンマーと比較してミャンマー側の習
慣を説明できるようになること、それぞれの習慣について疑問に思った点や興味を持ったことを質問できるようになること
ですが、道遥か遠いです。でも、とりあえず少しでも日本の文化習慣に対する理解を深めることが出来たと思います。



授業の様子

⑤JEP 派遣報告（2018 年 3 月・9 月）

総合国際学研究科 世界言語社会専攻 国際社会コース

博士前期課程 2 年

大橋 響

私は、2018 年 3 月 1 日～同月 11 日と同年 7 月 23 日～8 月 11 日の 2 回に渡り、Joint Education Program(JEP)の奨学金を賜りミャンマーに渡航しました。主な目的は修士論文執筆のためのデータ収集であり、それに向けて提携校であるヤンゴン大学にて事前指導を受けました。以下、①ヤンゴン大学での事前指導、②サイクロン・ナルギスの被災地における調査、③ヤンゴンにおける調査、④短期派遣による成果の 4 点に分けて記述します。

① ヤンゴン大学での事前指導

私は学部時代にヤンゴン大学へ 1 年間留学していた経験があることから、先生方は快く指導をしてくださいました。私は、2008 年にミャンマーに甚大な被害を及ぼしたサイクロン・ナルギスからの復興状況について調査を行っていました。具体的には最も被害の大きかったミャンマー南部のエーヤワディー管区を訪れる計画を立てていました。ご指導いただいた国文学科の先生方は被災当時のミャンマーの状況をよくご存知だったため、当時の状況についてご自身の経験をお話くださったほか、現地でインタビューするに当たっての全般的なアドバイスを下さいました（インタビューに応じて下さった方への謝礼についてのことや、質問票の添削など）。

② サイクロン・ナルギスの被災地における調査

調査を行ったのは、ナルギスで最も甚大な被害を受けた、ヤンゴンから車で 4～5 時間ほどの距離にあるエーヤワディー管区のボガレイ郡です。調査時はちょうど被災から 10 年ほど経過しようとしていた時期でしたが、未だにナルギスの影響が色濃く残っているように感じられました。現地で 10 軒ほどの民家を訪れてインタビューを行った結果、サイクロンによって引き起こされた塩害などによって米や魚の収穫量が減ったことにより、地元で十分な稼ぎを得られなくなった多くの人がヤンゴンへと出稼ぎに出ているということが分かりました。さらにその出稼ぎに出た人々が皆同じ地区に住んでいることに興味を引か

れた私は、さらにヤンゴンにて調査を継続することにしました。

③ ヤンゴンにおける調査

ヤンゴン管区フラインターヤー郡には大規模な不法占拠者集住地区が存在し、被災地で知り合った人々の家族もその地域に住んでいることが分かりました。フラインターヤー郡には大規模な工業地帯があり、不法占拠地区に住む人々の多くはその工場で働いています。不法占拠地区ということもあり、周囲の衛生環境は良好とはいいがたく、このような地区がヤンゴンに広がっていることに最初は驚きを隠せませんでした。以前から不法占拠地区は存在していましたが、ここ数年その数が急激に増加しているとのことでした。

主に調査では、不法占拠地区に住む人々が自主的に形成した自治組織の活動に注目しました。不法占拠地区はほかの地域と異なり行政がほとんど関与しないため、自治組織が治安維持や子供の教育環境の提供などを政府に代わって行なっていました。調査中にはダンマスクール（仏教の教えを子供に伝授する学校）の開校式を見学することができ、実質的には不法占拠という状態にありながらも、自らの住む環境を積極的に改善しようとする姿勢が非常に印象的でした。偶然が重なった結果ではありましたが、自治組織のリーダーを中心に詳しく話を聞くことにより、論文執筆のヒントが多く得られました。



不法占拠地区の様子



ダンマスクール開校式の様子

④ 短期派遣による成果

今回の派遣による指導と調査によって、今までほぼ明らかにされてこなかったヤンゴンの不法占拠地区の実情を明らかにすることができました。最初はおくまで災害にのみ焦点を当てるつもりでしたが、被災者の移住先にまで調査対象を広げたことによって、より独自性のある論文を書くきっかけが出来たと考えております。現時点で修士論文は提出済みですが、この派遣で得たデータが論文を執筆する上で最も重要な核となりました。全部で4週間弱という短い期間であったのにもかかわらず充実した調査が出来たのは、本プログラムによる支援を賜ることが出来たからこそだと考えております。貴重な機会を頂きまして、誠にありがとうございました。論文は提出しましたが、今後もこの派遣によって得られたことを社会に還元できるように努めたいと思います。

⑥JEP 派遣報告（2018 年 7-8 月）

東京外国語大学大学院博士前期課程

世界言語社会専攻国際社会コース

石田友倫子

ヤンゴン大学へのジョイントエデュケーションプログラムについて報告します。渡航期間は 2018 年 7 月 23 日（月）から 8 月 6 日（月）の約 2 週間で、ミャンマー連邦共和国の最大の都市であるヤンゴンに滞在しました。本プログラムに参加した目的として、自身の研究と修士論文の執筆のためには、ヤンゴン大学の先生方による指導と現地でのフィールド調査が必須であると考えたからです。

ミャンマー滞在中は、ヤンゴン大学での指導、資料収集と聞き取り調査、フィールド調査の 3 つの活動を中心に行いました。

（1）ヤンゴン大学での指導

ヤンゴン大学では、まず最初に国文学科の学科長とお会いし、自身の研究と修士論文の内容、今回の渡航の目的を説明し、ヤンゴン大学での指導とフィールド調査のスケジュールを話し合いました。具体的には、ミャンマー語やミャンマーの教育の歴史と制度について指導していただきました。ミャンマー語に関しては、朝の授業に参加しました。ヤンゴン大学国文学科では、平日の朝 7 時半頃から、一般向けにミャンマー語の授業を開講しています。ここでは、国文学科の先生方が日替わりで、表記や文法、発音などを担当しています。受講生の大部分は、中国や韓国の東アジア圏出身者でした。ミャンマーの教育の歴史や制度については、日本で文献を読んだだけではわからないかった箇所や文献を入手できなかった箇所を中心に丁寧に指導していただきました。

また、アクセスが難しいことや治安を懸念し、後述するフィールド調査の初日には、ヤンゴン大学における本学 GJO の日本語教育に参加された先生が、調査地まで引率していただきました。



図 1：ヤンゴン大学正門



図 2：ヤンゴン大学国文学科

(2) 資料収集と聞き取り調査：“Myanmar Literacy Resource Center”

修士論文では、初等段階におけるノンフォーマル教育実践をテーマとしており、ミャンマーをフィールドとしました。その中でも“Non-Formal Primary Education”（以下、NFPE とする。）に焦点を当て、研究しました。NFPE は、ミャンマー教育省や国際機関のユニセフなどと共同で運営されており、ミャンマー全土と国境沿いのタイ国内で実施されているため、ミャンマーのノンフォーマル教育の現状を把握するためには最適だと考えました。2 年間の学習で公立小学校卒業と同等の資格が付与され、修了後は公立中学校への進学が可能であり、ミャンマー全土で行われているプログラムです。

“Myanmar Literacy Resource Center”は NFPE の管理・運営を行っており、ヤンゴン大学の近くにあります。ここでは、プログラム開始当初からの実施郡区数や教室数、児童数、教員数、また各年度の修了率と進学率などのデータを収集することができました。ここでのデータから、NFPE 修了後の公立中学校への進学率が年々上昇しているとはいえ、依然として 50%以下の低い状態であることが明らかになりました。また、量的な側面からみると、僧院学校の在籍児童数よりは少なく、必ずしも公立学校に通うことのできないすべての子供たちに対して、教育の機会を提供しているとは言えない状況ということがわかりました。

(3) フィールド調査：ヤンゴン管区郊外 H 郡区 A 地区

実際にヤンゴン管区の郊外の NFPE の教室を訪ね、フィールド調査を行いました。A 地区での NFPE は、公立小学校内の空いているスペースや放課後の空き教室で授業が行われており、教師は 2 人で、それぞれレベル 1 とレベル 2 を教えていました。先行研究の中で成功したノンフォーマル教育実践に共通する点を中心に、公立小学校と NFPE 双方の授業

観察を行ったり、教師に話を聞くことにより、ミャンマーの初等教育の現状を把握することができました。



図 3：小学校の入口



図 4：小学校の校舎

また NFPE の児童に対し、アンケート調査を行いました。アンケートの内容は、児童の家庭環境（両親や兄弟姉妹の年齢・仕事・学歴）や公立小学校に通うことができない理由、どのように NFPE を知ったか、どの教育段階（小学校・中学校・高校・大学・大学院）まで進学したいか、などです。また、比較対象として、公立小学校の児童にもアンケートに回答してもらいました。調査結果として、公立小学校の児童と NFPE の児童の家庭環境に大きな差はなく、NFPE の児童が公立小学校に通えない理由として教育行政や制度による不備によるものが多いということが明らかになりました。



図 5：NFPE の授業の様子



図 6：NFPE の授業の様子

その他にも、何軒か NFPE の児童の家を訪問し、生活環境や調査地の地域性を知ることができました。ヤンゴン大学の先生による引率と交渉により、円滑に調査を行うことができました。

ヤンゴン大学でのご指導とフィールド調査は、現地でしかできない貴重な経験であり、多くを学ぶことができました。修士論文はここでの指導と調査を基に執筆したため、今回のジョイントエデュケーションプログラムは、修士論文の執筆に欠かせない渡航となりました。このような機会をいただき、心から感謝いたします。本当にありがとうございました。